

# 小児看護における看護研究

特集にあたって

## 研究：臨床に眠る小児看護の宝を発信していく手段

数年前、とある学術集會に参加したときのこと、知り合いの臨床の看護師に声をかけられました。研究に関して、思うように進められず困っている。どうしたらうまく進められるのか、よい方法はないのか、何か参考になる文献はないのだろうか、と話し始めました。

彼女が勤務する病院は小規模ではないので、それなりの研究体制があるのではないかと思います、相談できそうな指導的立場のスタッフの存在や中央研修の様子など、あれこれと聞いてみたのですが、いずれも彼女は「使えるリソース(資源)」あるいは「使いたいリソース」としてとらえていないようでした。最近では、研究に活用できそうな書籍類も多く出版されていますので、探せばフィットするものが見つかるのではないかと思います。よいものに巡りあっていないのか、使い勝手が悪いのか、こちらもリソースにはなっていないようでした。

それからしばらく、機会あるごとに臨床の看護師に研究について聞いてみましたが、それぞれに「思うように進まない」という研究体験をもっていました。現場での課題はたくさんみつかるものの、いざ研究として進めようとする、[結局、看護師の意識調査とかアンケートになってしまうんですね]と話す人や、研究内容を説明しても上司からのゴーサインが出ず、[全然わかってもらえない]思いを抱えている人、倫理的な課題がクリアできずに研究が始められなくて困っている人もいました。また、部署のスタッフだけでは研究遂行が難しいため挫折しかかっていたり、誰にどのようにサポートを求めたらよいのか迷っていたりする人もいました。一方、管理職のほうからは、現場での研究指導が十分でない現状や、指導者になり得る人材を育成する難しさも聞きました。このように臨床では、研究するほうもサポートするほうも、どうしたら

よいのか困っている様子がうかがえました。

臨床は事例の宝庫です。小児看護の宝がまだまだ眠っていると思います。事例とは単に「事例＝患者」というだけでなく、日々当たり前のように行っているケアや、普段は意識していない患者や家族への援助など、多くの「事例＝看護」もあると思います。気に留めなければ過ぎてしまうようなこれらの「事例」に何気なく意識を向けたとき、それが研究につながる最初の種(たね)となることも多いように思います。つまり、ふと気になったことやどうにかしたいと思っていることを解決するための手段の一つとして、研究があるのだと思います。

「研究はより実践的に、実践はより研究的に」大学院生のお世話になったある先生が、常々発信しておられたメッセージですが、本特集の構成を考えると、この言葉がいつも頭にありました。本特集は、日ごろの困りごとや気になったことを研究の形にしていくなりのガイドとなるような構成を心がけ、研究を行う看護師だけでなく、研究の指導やサポートをする立場の視点からも参考になる項目を設けました。研究発表や論文投稿がすぐできるといった裏ワザはありませんが、手元に置いて確認しながら進められる内容になっていると思います。日々の看護を研究的視点でとらえ直し、そしてよりよい看護を創造していく、その手がかりとなれば幸いです。

臨床の看護師が行う研究には、研究者が行う研究にはないよさがあると思います。小児看護の臨床だからこそできる研究が、もっと世の中に出てくることを願っています。

共立女子大学看護学部小児看護学准教授  
西田志穂 Nishida Shiho